

八犬伝富山の段 常磐津 全詞章

常磐津

本名題『八犬義士蒼勇猛』

作詞者・作曲者・初演年不詳

獅子は谷へ子を落して其勇を知り、虎の河を渡すは智なり、犬の夜を守るは義なり勇なり、主を敬ひ主を知るは是礼なり、其職を守りて私なきも又斯のごときとかや、御代治りて曇りなき、天津日嗣百々余り、御花園院の御宇とかや、頃は嘉吉二年の春、結城の軍破れて後、里見又太郎義実公、再び家を起さんと南総へ押渡り、滝田の城主とめきしが、安西が奸計にて既に危き折から、八房に伴はれ富山の奥の山に居、麓に立し高札の前に休らふ樵夫ども、先口々に高談、何と李助、此札が立てから二年越し山へ入ぬが、樵枯木が出来たであらう、モウも加減に山を開いて下さればよいにな、わしはゆう筆ぢやによつて高札は読めず、自体どういふ事ぢやナ、わら助の何言ふぞへ、そんなら、汝侶はまだ知ぬか、滝田の御城主様のお姫様が八房といふ犬と一緒に此山にお住みなされて御座るけな、ワレ又どうしてお姫さまとその犬が、おらも委しい話は知ぬが、夫故に樵夫山隠しに及ばず、汝人又は草刈りまで山に登るをお止めなされたと言事と、唯で傍から狩人の鉄八は進み寄り、コレコレその委しい話は必ずすなと庄屋殿の言付なれど、外に聞者もない此の麓、おらが話し聞きうわへ、かうと一昨年、の難渡年、お上は兵糧の尽きた折から、安西が八房より戦ひ寄る、今や落城と言時に、殿様が八房に安西が首をとらば姫をやらうと言たげな、夫を聞分け八房の犬は、大手を走り出で、安西が首を咬めて殿様の前に置き、大將なければ忽ち安西西方は亡びたり、八房は姫君の振袖を引咬へて引立てる、殿様は腹を立て突殺さんとしたまふを、お姫様は桶となり、君の仰は倫言暗然、出でてからぬ此身の因果、安西の首とりしは八房の手柄なり、国の為家の為身を捨るは憎からず、八房に伴はれ此富山の奥に居、それ故に此山に登ることお止めなされた、何と皆の衆痛はしい事ぢやないかいのう、と言に李助鼻すり、鉄八が譁訳でさりとと解つた犬の唯、大將の首取てお姫様を貰ふとは、羨望しい事ぢやないか、これからおらも戦があつたら雜兵の首なと拾ふてお末の一人も貰はうわいのう

跡に笑ひを樵夫ども、去なう去なうと夕間暮、我家我家へ戻り行く

濁世煙硝色欲界誰か五蔵の火宅を脱れて、祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きなれ、さらぬだに秋は寂しきものなるに、人跡絶し富山の奥麓に埋む落葉には、盛者必衰の理を示し、簀に響く漣津瀬と山又山の松風を、窸窣の友と身一つに、悟りすまして里見伏姫

苔の筵に坐を占めて、唱ふる経も黄鳥の、春去り来れば八重霞、花は遠目に見ゆれども、雲には近き山桜弥生は里の雛遊び、女夫双居て今朝ぞつむ、名もなつかしき母子草、誰が湯初し三ヶの日の、餅にあらむ菱形の、腰懸石も肌ふれて、や、暖き苔衣脱替へねども夏の夜の快涼しき谷風に、梳らして夕立の、雨にあらうて千す髪、蓬が下に鳴く虫の、秋としなれば色々に、岩間の紅葉織り映し、鉦の床の仮初の、宿としらでや應々鳴く、水沢の時雨晴間なき、果はこことも白雪の、はだにやれたる振袖を、か、けて室を立出給ひ

棄恩人無為報恩者と御仏は説せ給ふ、恩愛別離の悲しみも、皆父上の御為なるに、なつかしと思ひ奉るは、罪深き事ぞかし、三世の諸仏免させ給へいざや

花を奉らん、お、さうぢや

手許やさしく開伽手桶御法も菊の露雫、流れの音も山彦の、夫ああらぬか風ならで、遙かに聞ゆる笛の音に、伏姫耳を傾け給ひ

思ひ寄らざるあの笛の音、妾が山へ入りしより、昨日迄も今日迄も、狩する男薪樵る、賤も通はぬこの深山、珍らしいアノ音色、草刈童の迷ひ入りしか、但しは狐狸か山鬼か、障礙をなして自らが、道心を挫かん為か、何にもせよ心ならざるすきみやなナ

と見やう給へば向ふより、まだ振分のおどろ髪、年はやうやう六つ七つ、七巡りして坂道を牛にゆられて来りける、姫君暫しと呼止め

ノウノウ童人も通はぬ此深山へ登りしは心得ず、そなたは何れの里の子ぞ、聞ま欲しやと宣へば

ヲ、わしは牛馬のために草刈るものではない、お師匠様に使はるゝもの今日此山へ葉を採りに登りました

ム、葉をとりにといやるからは、そなたの師匠はお医者よな、シテその住居は

ヲ、此山の麓に住み、又ある時は湖先にある、常には人の病を治し、又ある時は箸をとり、人の吉凶禍福を占ひ、或は雨乞引和の加持、天地の間にありとあらゆること、知ざることはましますと、いと

賢しげに語りける

ム、そんならそなたも病の道は聞つらん、自らはさいいつ頃より夜に日に増て胸くるしく、次第次第に身の重きは奈何なる病ぞ、治する薬もあるならば教へてまとい宣へば

ヲ、夫こそはつはりのしるし又目の下に青濁とて、青き色の見えたるは、胎内に子を孕み、産月も近づきと、云に伏姫大笑ひ

ヲ、アノ子としたことが、流石は年ゆかざるしるし、訃を唱して聞すべし、此方へ来よと

招き給へば嬉しげに、牛の背より飛下りて、お傍近く歩み寄る、伏姫君は開伽桶の、菊の一枝手に取給ひ

コレ此花欲うはないかや

ヲ、下されやと

もつかかゝるも愛らしく、右よ左よ戯れて、与へ給へば手に持てこれ御覧せよ此花の、誰育てねど秋毎に己れと咲も雨露の、恵みを受し千代見草

齡草ともさまざまに、異名も多き黄金草、妾やさしき乙女草、いざ白菊の御身にも、子を宿さぬとは言難し、といへば姫君微笑て、いやとよ夫は僻事よ、夫とてもなき独身に、嬰兒を座べきやうはなし

大なしとは言難し、親の計せし八房の、犬は即ち夫なり、といふに姫君妾を改め

そなたはその初めをして其後を知ぬなり、御経の功ににて幸ひ身は汚れず、何ぞ悲類の八房に我身は清し潔よし、神こそ知せ給ひなん、といへば童子は打笑ひ、姫君こそ二を知て二を

知ぬといふものなり、交らぬとて孕まんや、鶴は千歳にして尾らず、相見て孕み子を産り、昔唐土楚王の妃、常に鉄金の柱を抱く、終に鉄金の丸かさを産り、則ち干将莫耶の劍これなり、憾なことを

語るべし、お前は當国里の息女、悪霊付し八房に、見入られしも定る因果、身は汚されねど恋慕ふ、一念凝つて胎内に、自然と宿る子はバツ子、されど身に添ふ水晶の、珠数の徳と法華経の

功にによつて、末終に里に家の忠臣と、生れ変わる方便方、かまへて疑ひ給ふな、さらばさばと牛の背に乗ると見えしが霧霞、コレのう待つて伏姫が、すがるとすれば朦朧と、妾は失せて

忽ちに、掻消す如くならにけり、ととばかりに伏姫は、泣崩おれて居たりしが、やうやうに顔をあげ

さては年頃信心なす、洲先の行者の仮初に、童子と現れ伏姫に、因果を論し告給ふか、さはさり乍ら情けなや

我身を慕ふ八房が、其執心の身に宿り、懐胎せしか浅ましや、取も直さず畜生道、ノウいまはしやコハ何とせうどうせうとわつと許りにどうと伏し、流涕これが泣き給ふ、やうやう涙を拭ひ

ア、歎くまい恨むまい、逆も畜生三界の、魔を宿せしこの身の業、若しも月満ち犬の子を産まば此身の恥、女牛らも義実が娘、憎しと思ふ八房を、守り刀にさし殺し、自ら逆も谷川の、水の泡とも消え

果てん、今日を限りの露の身も、せめて未来は仏果の種、ヲ、さうぢや

法の手向の開伽の水、汲んと岸に静々と、立寄り給ふに水の面、見れば不思議や我面影、映るは正しく犬の顔、若し八房が来りしかと見れども影も波の音、念珠頂きさしうつす、顔は変らぬ我が面影

ハテ不思議や初めの姿は犬の形、今また念珠をこの如く、かざして映せば我が面影、心の迷ひか空目かと、合点行ねば数珠押隠し、映せばまたも恐ろしき、犬の姿にぞつとして、数珠をかざせば我が面影

かくれば犬の顔形、わつと許りに声立て、狂気の如く立つ居つ

彼方へうつる此方へ倒れ、前後正体泣崩折れ、あやめも分ず歎きしが、果しなれば泣く泣くも、登る山路は剣にて、削る思ひにやうやうと、岩屋の内の苔筵、木の葉の上に坐を占めて、涙にいとど

露深き、今は此世の秋の霜、消る間近き玉の緒と、心細くも念誦ある、いと哀れを添んとや、妻恋ふ鹿の声澄みて、簀に響く山彦の、風の凄く更渡る

更渡り寄行く月もいとゝなほ、最早此世の名残の動、急がんとと御経の、紐をとくとく繰返し、第五の巻の提婆品、仏の誓ひ違はずば、女人成仏なきしめ給へと押載きて高らかに、御声清く読誦ある、

経の功力と妙音の声に感じて八房が聞居る所を

彼処より太腹どうと打抜く筒音、余れる玉に姫君も、肩先打れ伏し給ふ

向ふの森の茂みより、現れ出でたる金剛大助、折しも雲間に八月の、火繩打振り探り寄る

此方の數より義実公、狩装束弓杖つき、探り探りて手にあたる鉄砲をむつと取り、互に引あふ途端と途端、遙か彼方へ投退けたり、又立寄て弓に手を、懸て引あふ其折から、雲間を出る月影に、互に顔を

見合せて

御主君にてわたらせ給ふか

左言ふは金剛大助か、これはいかに

コリヤどうぢやと、呆れて言葉もなかりけり、大助は遙かにすすり

御使仕損じたる私なれば、一つの功を立たる上、御代に存ぜし所、噂に聞たる富山の有様、かの畜生を打殺し、姫君の御供して、再び帰参と此山へ、忍びて夜毎登りしかど、八房に出合す、初は

畜生山をかへしか、姫君を取返さずは何を手柄に金剛が、軽みの鎖を切果て、腹切んと幾度か、柄に手は懸けたれども、功もなきで結果なば、愈々不忠の名はのかれすと、洲先の行者へ祈誓をかけ、此所へ

来り見れば、姫君には御経を高らかに誦給ふ御傍にはかの畜生、憎さも憎しと呪ひを定め二ツ玉にて打留たり、姫君はいづくにおはす、伏姫さま姫君さまと、呼ど答は山彦の、簀に響く水の音、是は

不思議と兩人が、さがす岩屋の傍には、八房が斃れ死骸、内とすかせばこいかに、打伏給ふ伏君の、姿に驚く大助が、胸は早鐘氣は狂乱、チエ、口惜しやな、畜生奴を打放したる鉄砲に、手強く

仕込し玉薬、余り強くし姫君に、手を負せしか残念やと、余りの事に茫然と、呆れ果たる計なり

義実公は立より給ひ、急所はよけて擦り疵、それと用意の印籠を、差出し給へば、大助は伏姫を抱起し、気付を含ませ耳に口、伏姫さま姫君さまのうと、声を限りに呼生れば

息ふきかへし目を開き、ム、

ヲ、気が付きたるか

ア、、、父上様か、そなたは大助

姫君様お手は浅い、御心確にお持あそばせ、大切の御身の上、憎き畜生二つには、功を立んと二ツ玉にて打たれど、玉が余りて勿体なや、姫君までも、あやまちし、此身の罪のいかにせん、科に科を重ねし

某、せめて冥土で申説と、刀の柄に手をかくれば

ヤレ待て大助早まるな、某がいふ事ありと押止め、如何に兩人蹠に聞け、戯の一言にてかゝる返事を引出せしも身があやまり、悔んで返らぬ因果の理屈、思ひ出せば、昔、大助が父金剛八郎、大功を